

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スナップ
Author(s)	児童の言語生態研究会, ; 川田, 靖子
Citation	児童の言語生態研究 , 5 : 58 - 58
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045061
Right	
Relation	



女の子は言葉が早いというのは必ずしも本当ではない。千帆子は誕生すぎまで一言もしゃべらなかつた。母親の呼び名を一番におぼえるというのも事実。反する。食物を意味する「マンマ」が早いというのも嘘だ。言葉の順序は興味と一致するように思われる。千帆子の場合には外出を意味する「モンモ」、フランスから来た人形のナディームを呼ぶ「ナナーナ」、ぬいぐるみの熊の呼名「アツフヨン」、飼猫ビヤヨの「ピツチェン」、ミルクの「ネンネ」の順だった。対人関係はその後に来る。「パーチャン」(祖母が直接世話をしていた)が一番早く「オチャマ」(父親)十九ヶ月目にやっと「カアチャマ」が云えた。これら十語に満たない言葉が二十ヶ月まで続く。この時期から他家へ昼間預けることとなり急速に言葉がふえた。何といつても食物に関しては本能的な興味があるらしい。「ドンドン」(うどん)「タンタ」(卵)「パンバ」(パン)「ジンジン」(ニンジン)「イチコン」(みかん)次に身のまわりの動物や玩具「ワウワ」(近所の白黒の犬をジョンと呼び、ホルスタインの牛もジョンである)「リンランリンラン」(オルゴール)

十六ヶ月目にはじめてセンテンスになった言葉を口にする「ワウワブーノン」(シェパードが車に乗っているのを見て)一貫した対話が成立したのも同期である。添い寝をしながらその日のことを話す。「ちこちゃん、今日どこへ行ったの?」「モンモ」「おんもど何見たの?」「ジョン」「ジョンはどうやってた?」「ゴロン」(ねていた)あるいは「タツチ」(起きてた)「なんてないたの?」「ワウ」

二十二ヶ月目から保育園に入る。急激に情緒が発達し悲しみや恐れがあらわれる。夕暮のうすら明りの中で

「チツチャンカーシイノオバアチャンニアイタイノ」といわれるとこちらも泣き出したくなる。一人前に猫

を叱る。「アメモ、アボン」(駄目よ阿呆)

「イヤノボン」(怒って物を投げて)

「チョキンパン」(いばって牽制する)

「オチャマババイアチキナチャイ」(お父さんさよならあっちへ行きなさい)

大人をからかうこともおぼえる

「ちこちゃんお父さん好き?」

「キライ」

「お母さんは?」

S N A P

スナップ

S N A P

神様を知りお祈りもはじめる。

「ちこちゃん、何お祈りしていたの?」

「ウンチスポンテデルヨウニ」(堅目で痛いのが最大の悩みらしい)

架空の友達ビッキイが存在する。二階の窓から話しかける。

「ビッキイドコニイルノビッキイ、ナニシテルノ、コウチラッシャイ、カワイネー」

五分くらいしゃべりつつける。

怪獣のメンコやトラランプが気に入っているのはいが

機嫌悪い時父親を指さして

「オチャマジャナクテカイジュ」

おこるとすべて否定文となる。

「これなあに?」

「オメメジャナイ」

「こつちは?」

「アンヨジャナイノ」

「じゃ、あんただあれ?」

「チツチャンジャナイノ」

この子の特徴と思えるのはしかし二つの物の共通点

を見つけ出すことだ。車のテールライトを「イチンゴ(母)ミタイ」ランニングを着たわが姿を鏡に写して

「オチャマミタイ」は平凡だが万年筆のキャップを指

にさして、「タケウマミタイ」とうもろこしをさわりながら「ソロボンミタイ」は傑作の部類だろう。

罵言は悪い言葉だと意識しているらしく単独では用

いない。

「ミワコチャン、ナンダヨウテツタ」

「バコバコチンドンユ(馬鹿馬鹿チンドン屋)テ、ミ

サチャンガイツタ」

という云いまわしをするのは、気質的に幾分内気なせ

いもあるのかもしれない。

(川田靖子)

「キライノ ケタケタケタ(笑い)フザケテルノ」

二才の誕生日頃からお化けが最大関心事となる。友

達との対話

「ア、リカチャンダ：： オバケミタ?」

「ウウンミナカッタ、チツチャンハ?」

「チツチャンモミナカッタ」

「ヨカッタネー」

それでもこわさはなくなるらない。二言目には

「コナイカナ?(お化けが)」